

能を切る



「四賢婦人・矢嶋梶子の生涯」

文＝福永無想

第十二回 「道ならぬ恋」

「娘さんを学校に行かせてあげて下さい。この子の将来において教育は必要です」
「俺ら貧乏人の娘にや、学問なんていらねえ。こいつにや働いてもらわねえと」

梶子は受け持つ児童が登校してこないことを案じ、家を訪ねた。貧乏長屋に暮らすその娘は、安定した仕事も持たず昼から安酒を浴びる父親と、死別した母親に代わり幼い弟を世話しながら、八百屋の下働きで得たわずかな手間賃で暮らしを立てていた。

「月謝はいりません。筆記具は私が…」
「うるっせゝな先生、けえゝつてくれっ」
父親の罵声に梶子の言葉は飲み込まれてしまう。こうした家庭の事情を持つ子どもは多く、中にはわが子を身売りする親もいた。そんな話を耳にするたび、梶子は己の無力さにさいなまれるのだった。

梶子がこうして公私を超えて児童らに親身に接するのは、熊本に残してきた子どもらに、母親の務めを果たせなかったざんげ

の思いからなるものだったかもしれない。

「元氣のごたるな、お勝」

「お勝さん、主人がお世話になりました」

猿楽町の家に熊本から源助の家族と、矢嶋家の長女で双子の一人、藤島もと子が息子らと上京してきた。姉らは梶子が改名したことは知っていたが、顔を見ればどうしても呼び慣れた名前が口に出る。

「この家にもぎやかになることだろう」

久しぶりにそろった家族に囲まれ源助は上機嫌であった。だがそれもつかの間、源助は福岡県知事・渡辺清の元での大参事官に任命されると、慌ただしく家族らと九州に向かったのだった。

この頃の梶子は実に、はつらつとしていた。教師の仕事に慣れたこともあつたろうが、齢40を過ぎたとは思えない、若々しい色香をにじませていた。

源助の書生で、東北出身の鈴木要介は鼻筋がすつと通った端正な顔立ちをしていた。梶子より10歳以上も年下だったがひどく大人びて見え、かと思うと情熱的で、他の書生とは比べものにならないほどの押し出しがあつた。そんな鈴木を梶子が意識するようになったのは、上京して間もな

くのことだった。
東京の地理に疎い梶子が外出するたびに、いつも鈴木が同行した。教員伝習所に

通っていた頃も、授業の復習に鈴木は熱心に付き添ってくれた。

「梶子さん、今夜も勉強に付き合いますよ」

「そう思い、夜食に要介さんの好きなお団子を買ってきましたの」

その高揚した艶のある声は鈴木を喜ばせた。そして二人が、男と女の関係になるのに時間はいらなかった。

梶子は初めて、自分の意志で一人の男を愛した。それは梶子が初めて覚えた女の喜びだったかもしれない。どこにいても、何をしていても鈴木が浮かぶ。だがこの恋は道ならぬもの。鈴木には故郷に残した妻子がいたのであつた。

（この行為が許されるはずがない…）そう頭では分かっている、恋の毒は二人の身も心も侵し、次第に理性と冷静さを奪っていった。

東京に来てからというものの、梶子の環境は一変していた。熊本にいた頃のような閉塞感や、他人の目に束縛されることもなく、自分らしく生きることのためらう理由などなかった。不義の恋に落ちたことも、心のままに突き動かされてのことだった。

だが果たして、神はそれを許すであろうか。そんな鈴木との逢瀬はその後、梶子に神をも恐れぬ覚悟を抱かせることになるのであつた。

※この物語は、矢嶋梶子の資料をもとに描いたフィクションです



四賢婦人記念館

益城町杉堂1250 電話/286-4959

開館/9時30分～16時30分 休館/月曜(祝日の場合は翌日)

入館料/一般・高校生200円(160円)、小中学生100円(80円)

※()は30人以上の団体割引料金

